国文学史の誕生

千葉真也

はじめに

明治二十三年、三上参次と高津鍬三郎による『日本文学史』が出版され、以後十年あまりの間に二十部近い『国文学史』や『日本文学史』が出版された。本稿は、発生期の「日本文学史」「国文学史」を概観し、それらの「文学史」において過去の作家や作品に対する評価がどのように変わっていったのかを検討する。とくに『万葉集』・『古今和歌集』・蕪村などの評価に決定的な影響を与えたとされる正岡子規との関わりを考えてみようと思う。

明治時代、和歌の規範であった『古今和歌集』に『万葉集』が取って代わるというのは常識であるが、価値の転換に大きな役割を果たしたのが正岡子規の「（再び）歌よみに与ふる書」（明治三十一年）であったというのも通説である。

また、蕪村が高く評価されるようになったのも、明治三十二年の『俳人蕪村』などによる子規の働きが大きいとされる。その細かな様相を点検しよう思う。すなわち、「国文学史」は誕生後間もない時点で文学史上の価値観の転換に遭遇する。どのように『万葉集』が称揚され『古今和歌集』がおとしめられるようになっていったか、また、子規がその価値を称揚した蕪村の位置づけはどのような変化を見せるのか、同時代に続続と毎年のように出版された「文学史」を名のる書物において、後年まで続く枠組みがどのように形成されたのか、そのようなことを考えてみよう。

一　文学史はどのように生まれたか

明治三十六年八月十日の附言のある永井一孝の『国文学史*1』（早稲田大学卅六年度文学教育科第二学年講義録）の第二章は「国文学史に関する著書」となっている。そこには、明治二十三年の三上参次・高津鍬三郎による『日本文学史』から明治三十五年二月の、これも三上・高津の手になる『刪定　日本文学小史』まで、年代順に二十に近い「国文学史」や「日本文学史」という名の書物が紹介されている。

日本文学史（明治二十三年　三上参次・高津鍬三郎）
中等教育　日本文学史（明治二十五年　小中村義象・増田于信）
新撰日本文学史略（明治二十五年　鈴木弘恭）

和文学史（明治二十五年　大和田建樹）
教科適用日本文学小史（明治二十六年　三上参次・高津鍬三郎）
中学国文史（明治二十八年　新保磐次）
日本文学小史（明治三十年　中等学科教授法研究会）
日本文学史要（明治三十一年　佐々政一）
日本文学史（明治三十二年　アストン）
日本大文学史（明治三十二年　大和田建樹）
国文学史十講（明治三十二年　芳賀矢一）
中等教科日本文学史（明治三十三年　内海弘蔵）
日本文学史（明治三十三年　鈴木忠孝）
中等教科日本文学史（明治三十四年　笹川種郎）
日本文学史教科書（明治三十四年　藤岡作太郎）
日本文学史教科書備考（明治三十五年　藤岡作太郎）
国文学史教科書（明治三十五年　高野辰之）
刪定日本文学小史（明治三十五年　三上参次・高津鍬三郎）

永井はこれらを列記した後、「講義録を一巻とせるもの」として、関根正直の『日本文学史』と萩野由之『日本文学史大要』が紹介されている。関根のものは「明治二十六年の頃哲学館の講義録に載せられ」、萩野のものは「明治二十七八年の交尋常師範学科講義録に載せられたるなりとぞ」とある。さらに永井自身の「本講義録に於いて物したる」『日本文学史』、和田万吉と永井の共著の『国文学小史』（明治三十二年）『刪定国文学小史』を付け加える。

大部分は「国文学史」か「日本文学史」を書名の全部または一部とするが、『和文学史』（大和田建樹）という珍しい書名もある。ただし、「国文学史」と「日本文学史」と、書名が内容的な違いを意味しているわけではない。本稿は主に「国文学史」という言葉を用いるが、特段の意味はない。なお、『日本文学史』とか『国文学史』とか似たような書名ばかりで、筆者自身も混乱しそうになるので、以下、必要に応じて書名の前に著者名を付けておく。

早稲田の講義録という形で毎年のように文学史を世に送り出した永井一孝は、これらの「文学史」に一つ一つ短評を与えた後、次のように総括する。[*2]

そもそも我が国に国文学史の公にせられてより僅かに十年を出でざるに既に十有余種の著書を見る、国文学史の研究宛も隆盛なるかの観あり。然れども上にも記載したるが如く十有余種の文学史も仔細に稽査し来れば何れも大同小異にしてアストン氏のと芳賀氏のとの稍々見地を異にしたる外最初に出たる三上氏等の書に幾何も抽んでたる所あるを見ず。但し是等の中の多数は中学校師範学校及び高等女学校などの教科書として編纂したるものなれば其の当否は教科書としての如何に存するものなるべし。

永井の言うように、多くの文学史は教科書としての需要に応じて作られたものであり、その序文にも文学史の意義付けなどを詳しく見ることはできない。規定された時間内に収まるようなものでなければ実用にならぬのであるから、序文も至って簡潔にその本の簡明を誇示するようなものが多い。しかし、最初の文学史である『日本文学史』や、数年後に五冊本の『日本大文学史』を完成することに

なる大和田建樹の『和文学史』などは、文学史を作り出す意気込みを若々しい筆致で記している。

一　文学の効用、文学史の価値等は、本書総論に於て之を論じたれば、今、茲には著者が此書を作りたる来歴を述べて、其志のあるところを示し、并せて、此書の体裁に就きて一言せんとす。

一　著者二人曾て大学に在りし時、共に常に西洋の文学書を繙きて、其編纂法の宜しきを得たるを嘆賞し、また文学史といふ書ありて、文学の発達を詳かにせるを観、之を研究する順序の、よく整ひたるを喜びき。之と同時に、本邦には未だ彼が如き文学書あらず、また文学史といふ者もなくして、本邦の文学を研究するは、外国の文学を研究するよりも一層困難なることを感ずる毎に、未だ曾て、彼を羨み、此を憐み、如何にもして我国にも彼に劣らざる文学書また彼に譲らざる文学史あらしめんとの慷慨の念、勃然として起らざること無かりき。……著者の学友なる上田万年氏は、国文学なる一書を出板せられ、芳賀矢一、立花銑三郎の両氏、また国文学読本を公にせられたり。

一　本書の体裁は、西洋各国にある文学史と文学書との体裁を参考して、之を折衷斟酌したるものなり。……二者を合せて一種特別の文学史を作らんには、……特に教科用に於て其便多かるべしと思ひたり。……

一　本書は実に本邦文学史の嚆矢なり。……既に文学の歴史といへば、通常の文学書に於けるが如く、妙絶にして弊害なき例証をのみ掲げ、以て足れりとする能はず。猥雑卑野なる時代には、之が反照として、必ず猥雑卑野なる文学のあるあり。（『日本文学史』緒言）[*3]

わが文学史かゝんと企てしは明治十三年。東京に出たる翌年なりき。一日友人の持ちたるコリア氏の英文学史を見て、我国にも斯かるもの書きて見ばやと。まづこゝに思ひ起しつるが。其後本郷の下宿に居て彼書を手ならし読むまゝに。興味いよいよ加はりて。チョーサーは人麿。スコットは馬琴にやあらん。羅馬盛衰記のギボンこそ日本には無けれなど比較しつつ。明けても暮れても我腹稿をぞ立て居たりし。（『和文学史』自序）[*4]

両者とも、西洋人の書いた文学史を見て、「如何にもして我国にも彼に劣らざる文学書また彼に譲らざる文学史あらしめん」「我国にも斯かるもの書きて見ばや」と思ったのが第一の動機である。加えて、これまでこの国になかった文学史を著すのには、文学の将来についての指針を示そうという意気込みも存在した。単に、西洋にあって我国にはないからという動機だけではない。

今、余輩が、此文学史を著して、本邦文学の光輝を発揚し、以て右に云へる効果を奏せん事を冀ふは、特に今日に於ては、甚だ必要のことと信ず。蓋し文学史は、国民をして、自国を愛慕する観念を深からしむるのみならず、現時文章の体裁の千差万別なるを憂ふる者は、此史に徴して既往に鑑みなば、其適従するところを定むるにつきて、裨補することあるべければなり。（『日本文学史』上）[*5]

和文学史は我国文学の沿革を述べ、読者をして明治文学の因つ

て来る処と、将来文学の鑑むべき処とを知らしむるにあり、徒に古文古歌の作例と其出来事とを、連絡なく列挙せるものにあらず。（『和文学史』凡例）[*6]

数は少なくないものの、中等教育の教科書としての需要に応えるものが多く、それらは内容も分量も似たりよったりと永井はまとめているが、大同小異の文学史とはいえ、志すところをあえて言明するならば、『日本文学史』や『和文学史』と異なるわけではない。大和田の言う「古文古歌の作例と其出来事とを、連絡なく列挙せるもの」を送り出すことになったとしても、である。

文学史を読まむ者は、古来斯文の沿革盛衰を見ると共に、傍ら時制風俗を察し、前轍に鑑みて、深く後来に注意せよ。今日以後の文学を、いかなる方に趣け、雑体なる文章をも、いかなる所に定むべきか、是れらも皆、文学史によりて、得る所あらむかし。（関根『日本文学史』）[*7]

文学史の目的は「文学史の嚆矢」である三上・高津の『日本文学史』以来、「此史に徴して既往に鑑みなば、其適従するところを定むるにつきて、裨補すること」にある。古来の文学作品の、それなりに筋の通ったカタログの提供によって「本邦の文学を研究するは、外国の文学を研究するよりも一層困難なること」という状態からの脱却は果たされたと言えるだろう。三上・高津の『日本文学史』は文学史の出発点だけあって、非常に豊富な内容とそれを反映して詳細な目次を持つ。とくに平安時代までが非常に詳しい。すなわち、総論で文学史や文学の定義を述べ、第一篇「日本文学の起源及び発達」が続き、第二篇「奈良朝の文学」において『古事記』『万葉集』が出てくるまでに九十ページ以上を費やす。それが、中等教育の教科書になると非常に簡単である。[*8]

総論
第一篇　上古又混沌時代　神代文字及び歌謳・漢学及び仏教の伝来
第二篇　奈良時代又万葉集時代　奈良時代の文章・奈良時代の歌・片仮名の創作
第三篇　藤原時代又源氏物語時代　平仮名の創作・藤原時代の文章・藤原時代の歌
第四篇　鎌倉時代又戦記文時代　鎌倉時代の文章・鎌倉時代の歌
第五篇　足利時代又謡曲文時代　足利時代の文章・足利時代の歌
第六篇　徳川時代又文学極盛時代　徳川時代の文章・徳川時代の歌

「源氏物語時代」のようなサブタイトルはいささか異様であるが、時代の特徴としては違和感はない。以後、右のような枠組みで中等教育の生徒は作家や作品の名前を暗記することになる。

だが、実際のところ、「其適従するところを定むる」上でこれらの文学史の果たした役割がどれほどであり、「明治文学の因つて来る処と、将来文学の鑑むべき処とを知らしむる」ことに文学史がどれほど寄与したと言えるか、うたい文句を真に受ける必要はないかもしれないが、「古来斯文の沿革盛衰を見る」ことにおいても、続々と現れた文学史より、一人の実作者兼批評家の役割が高く評価

されているように思われる。

「国文学史」における正岡子規の役割

俳句や和歌の革新者であった正岡子規は、同時に文学史上の価値の転換をもたらした存在である。辞典や注釈書で『万葉集』・『古今集』・蕪村などの受容史の記述を見れば、子規の役割が肯定的であれ否定的であれ、たいへん重要なものと考えられていることが分かる。まず、日本古典文学大辞典で『万葉集』・『古今和歌集』・蕪村などの項目を見てみよう。

古今和歌集

近代では明治二十七年の与謝野鉄幹「亡国の音」は、香川景樹流の歌壇の趨勢を「婦女子の歌」「狭小」「繊弱」「卑俗」等々と攻撃したが、それはとりもなおさず古今調への非難と見られよう。明治三十一年の正岡子規「歌よみにあたふる書」は、万葉調讃美と表裏をなした古今調否定として知られ、「理窟」「駄洒落」「主観的」「嘘」等々の非難の根底には、直接的に感情を述べる『万葉集』と、言葉のあやの世界に生きる『古今集』とのちがいが、対極的にとらえられている。

万葉集

そして三十年代に入ると、『古今集』尊重の歌壇の風潮を大胆に否定し、『万葉集』の復活を力説強調した正岡子規の「歌よみに与ふる書」が出現し、以後、根岸派・アララギ派を通じて歌壇における『万葉集』批評が活溌化することとなり、伊藤左千夫・長塚節らを経て、大正・昭和にかけ、島木赤彦・斎藤茂吉・土屋文明等が目覚しい活動を示し、近代的な万葉観の確立に主導的な役割を果たすこととなった。

蕪村

『俳諧発句題叢』（文政三年（一八二〇）刊）を通じて蕪村を知った正岡子規は、八方探索の果てに明治二十六年から二十七年にかけて『蕪村句集』上下を相次いで入手し、俳人蕪村の名を世に紹介するとともに、蕪村調を唱道、明治三十年に始まる『俳人蕪村』の連載を通じて、その客観的・絵画的表現を範に仰ぎ、写生を軸とする近代俳句の路線を決定した。子規の発見によって復活して以後、近代の俳人・詩人にして蕪村から何らかの影響を受けないものはないといってもよく……

このように価値の転換者としての子規については、評価が定着していると言えるのだが、子規によって否定された『古今集』の注釈者にとっては、子規は近代の偏見の張本人である。

日本古典文学大系『古今和歌集』

明治になって、正岡子規は古今集を理窟の歌であってつまらないとし、今もその思想が普及して定説のようになっている。[*9]

古今和歌集全評釈

第二は、古今和歌集に対する近代の偏見である。時に三十歳の正岡子規が一種のプロパガンダとして当時の偶像であった古今和歌集とその代表的歌人紀貫之との権威を激越な調子で打倒しさることにより近代ののろしをあげたのであるが、爾来、注釈者・研究者の目もそれに眩惑されてしまい、撰者たちの歌より

も詠み人知らずの歌の方を万葉的であるとて高く評価したり、たまに景樹などがいきいきした解釈を施していると、それは「迎へての解」であるとして退けたり、古今和歌集の歌とし言えば、おおむね観念的にして理屈でこねあげたくだらないものと見るのが正統な解釈であるかのように錯覚されてきた感がないではないのである。[*10]

『古今和歌集』の注釈書と言えば、解説の中でかなりの分量を費やして、子規以来の偏見に対して反駁するのを習いとしているようであるが、『古今和歌集』が再評価されるようになってきた後でも、新日本古典文学大系『古今和歌集』の解説は冒頭に子規の「再び歌よみに与ふる書」[*11]を取り上げる。

明治の俳人正岡子規がその「再び歌よみに与ふる書」の中で、貫之は下手な歌よみにて、古今集はくだらぬ集に有之候。と主張したのは、明治三十一年（一八九八）二月のこと。以来、彼のこの趣旨の発言は十たびも続く。これは、子規が在来の堂上的な和歌の革新を試み、『万葉集』及び源実朝などの万葉調の歌を称揚するための手立てとして、『古今集』に対して直截的に発言した点が大いにあって、そこに誇張も言い過ぎもあろう。しかもなり振りかまわぬこの唱道は、以来百年近くも文学史の側の大勢を支配してきたのである。これを受けて、「万葉集は世界的な遺産、古今集はつまらぬ歌集」とは、今もなお生きている。……その主張の明々白々たる痛快さに、嘗て昭和十年代の杏壇の教授はおろか、若い学生たちも手を拍いて喝采したところ。この子規の力説した点は、今や批判の対象となってはいるものの、まだそれは強い火影を持ち続けている。（新日本古典文学大系『古今和歌集』[*12]）

だが、明治二十三年以来、次々と公刊された「文学史」は、子規に追随するばかりであったのであろうか。

『万葉集』や蕪村の方は日本古典文学大辞典だけで済ませておくが、そこでも、子規に対する言及はあっても、大量に著された文学史の類に対する言及は無い。大半が中等教育の教科書として作られたものであるのだから、独自の見解を述べるはずもなく、従って受容史の中で注目されないのも当然であるかもしれない。だが、ここでは、追随者という扱いしか与えられていない文学史の記述を少し丁寧にたどってみよう。もろもろの『文学史』の側から測定することで、価値観がどのように転換し、あらたなものが定着して行くか、明治二十三年に出現して間もなく価値観の転換に直面することになる日本文学史と文学の現場がどのように関わるか、考えてみようと思う。はたして文学史は、作品や作家の価値判断において独創に欠ける忠実な追随者であったのであろうか。

正岡子規は「国文学史」にどのように影響を与えたか

古典作品の評価において正岡子規が果たした役割は、非常に大きなものであったと考えられている。すなわち、子規は『万葉集』の復活を「力説強調し」、『古今和歌集』について「理屈の歌であってつまらないとし、今もその思想が普及して定説のようになって」おり、蕪村を発見したというのである。しかし、今回取り上げる最初

期の「国文学史」を一つ一つ見て行くと、それほど簡単な話ではない。『万葉集』、『古今和歌集』、蕪村の順に点検してみよう。

『万葉集』の評価

結論を先に述べてしまうと、百年を経過した我々が思い込む程、子規の役割は大きなものではなかった。子規の唱道を待つことなく、当初から『万葉集』は至上の高みに持ち上げられていた。

最初は、当然、三上・高津の『日本文学史』である。『日本文学史』によると、奈良時代は散文よりは和歌の時代であり、この時代の和歌すなわち『万葉集』は後世の和歌の及ぶところではない、「万葉集は、実に我国の詩経なり」、これが最初の文学史における評価である。

奈良の朝は、我国の文学の、始めて光輝を放ちし時代にして、就中、其最も観るべき者は和歌なり。……散文の尚未だ素樸なるは、和歌の富贍婉麗なるに比すべきに非ず。実に此時代の和歌は、孰れの点より観察するも、秀妙なるものにして、後世の企て及ぶ処に非ず。故に此時代を呼びて、和歌の時代といふも決して失当の言にあらざるべし。[*13]

奈良の朝は、和歌の時代なり。上は万乗の貴きより、下匹夫に至るまで、皆、歌を詠まざるなし。……万葉集は、実に我国の詩経なり。[*14]

『万葉集』を和歌の歴史の最上のものと評価するのは、以後の「国文学史」のほとんどすべてに共通すると思われる。確かめ得た範囲ではそう言ってしまって良い。文学史の著者には古いタイプの国学者に属する者も、新しい時代の教育を受けた者もあったが、『万葉集』の評価となると違いを見つけるのは難しい。

鈴木『日本文学史略』

此集の如きは本邦の詩経ともいふべきものにて。その歌調の優美にして虚飾なく。語気の素朴にして雄健なるは。後輩の遠く及ばざる所なり。然して此の長所は集中の長歌に多し。既に空前絶後などの文字を以て人の賞賛するも決して誣言には非るなり。余が常に万葉前に万葉なし。万葉後また万葉なしといへるは。此の長歌の上に於ていへるなり。[*15]

萩野『日本文学史大要』

次に和歌の事をいはん。和歌はこの期に至りて、大に発達せり、よりて奈良朝時代を以て、和歌の黄金時代と評するものあるに至れり。この和歌を集めたるものを万葉集といふ。……此後の古今集以下の歌とても、各その長所はあれとも、歌の風調の高尚にして、雄大健勁なるは、此の集に及ふものなく……人を感動すること最深し。支那にては詩経三百篇を貴ひて、一の詩集なから、経書と尊重することなるが、この万葉集も、かの詩経におけるか如きものなり。……されはこの時代を、和歌の黄金時代なりといふも、尤の事とすへし。[*16]

中等学科教授法研究会『日本文学小史』

万葉集の歌は、国文学史上の至宝とする所にして、最も注目すべきものなれば、余は、特に、この時代を、万葉集時代と称せむと欲するなり。[*17]

奈良時代文学の粋は、万葉集にあり。奈良時代は歌の時代、殊に長歌の時代にして、その歌は、悉く、この集に載せられたることなれば、この集の貴重なること、知るべきなり。[*18]

和田・永井『国文学小史』

第貳編　奈良時代　推古天皇御即位の頃より桓武天皇の御宇平安奠都の頃までをいふ。漢学・仏教の影響既に見え、和歌極盛の時なり。散文には宣命及び叙事の文有り。[*19]

いずれの著者も、奈良時代は和歌極盛の時代、和歌の黄金時代であり『万葉集』は文学史上の至宝、我国の詩経などと、口を揃え言葉を尽くして『万葉集』を礼賛するのである。『万葉集』の場合、子規の提唱に先だって最も高い評価を与えられる。

『古今和歌集』の評価

『古今和歌集』の注釈者たちは、しばしば正岡子規に言及して子規の偏見を慨嘆する。たしかに子規の言葉は強烈である。よく引き合いに出される「(再び) 歌よみに与ふる書」を引用しよう。

貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。……先づ古今集といふ書を取りて第一枚を開くと直に「去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て来る、実に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。……この外の歌とても大同小異にて駄洒落か理窟ツぽい者のみに有之候。……貫之とても同じ事に候。歌らしき歌は一首も相見え不申候。嘗て或人に斯く申候処、其人が「川風寒千鳥鳴くなり」の歌は如何にやと申され閉口致候。此歌ばかりは趣味ある面白き歌に候。併し外にはこれ位のもの一首もあるまじく候。「空に知られぬ雪」とは佗洒落にて候。「人はいざ心もしらず」とは浅はかなる言ひざまと存候。[*20]

率直・無遠慮な物いいである。「理屈」や「小細工」などの語によって、子規は『古今和歌集』や同時代の歌人をけなすことが多かった。理屈や駄洒落などの語は子規の常用したもので、それらの語があっても「(再び) 歌よみに与ふる書」の影響とは限らない。子規の歌論を集めた『竹里歌話』から二つ、追加しておこう。まず、「(再び) 歌よみに与ふる書」に先立つものを一つ。

千々に一つを対する位の事は何の珍しくもなく又文学としては極めて下等の文学なり。和歌は古今時代に至り全く斯る小細工に落ちて後世の俗歌の俑を開けり。千里の此歌の如き尤も人口に膾炙してしかも卑俗なり。(棒三昧　鈔　明治二十八年十二月)[*21]

大江千里の「月見ればちぢに……」の歌をを取り上げたものだが、この歌は「四たび歌よみに与ふる書」の中でも、「下二句は理屈なり蛇足なりと存候」とけなされる。また、

○どの歌この歌といはんより、古今集を開いて初めより貫之の歌を見んか。第一に

袖ひぢて結びし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん

とある、これ理屈なり。立春の日直に氷の解くる者に非ざるは誰も知り居るなり。それを知りながら立春といふ語よりわり出したる理屈を詠むは貫之の人情を解せざる証として見るべし。

……

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける

亦理屈なり。「花なき里も」とことわりたる理屈加減は一通りの理屈に非ず。之に加ふるに、「霞たちこのめもはるの」といふ言葉のいやさと、縁語のいやさとありと、鼻もちもならぬ歌となり了りたり。（歌話　明治三十二年七、八、九月）[*22]

ところが、「国文学史」を見る限り、それほど急に不人気が定着したというわけではない。教科書が古典的な作品をけなすことに熱心でないのは当然であるが、「至宝」と評価される『万葉集』に勝るわけではなくとも、進歩した点もあるとか、『万葉集』とは異なった方面に特色を発揮したなどと評価するのが一般である。ただし、子規の提唱の影響をうかがわせる叙述がないわけではない。

三上・高津『日本文学史』

古今集の歌は詞も姿も万葉のものと異なること、上に述べしがごとしと雖、決してこれのみを以て、古今は万葉より劣れりとはいふべからず。唯、長歌のみは、如何に論ずとも、万葉独得の長処なること、争ふべからざれども、其短歌に至りては、或は質に過きて、文に乏しきを免れず、古今の歌は、婦人の国に生まれし歌なれども、奈良の朝を去ること、尚未だ甚だ遠からざれば、其雄壮活溌なる気風の痕跡、尚、歴然として認め得べし。その文質孰れの一方にも偏せずして、華実を兼ね備へたるもの多きが如きは、或は万葉に駕すともいふべし。[*23]

大和田『和文学史』

短歌は如何と云ふに、万葉の墨画なりしものは、彩色画と為りて一気呵成の韻致筆力は、或は減じたる感あれども、着色画線の腕前に至つては、遙かに歩を進め、琢磨せる言葉を以て琢磨せる思想に装束せしむるを発見せん。[*24]

中等学科教授法研究会『日本文学小史』

万葉時代の長歌は、遂に見るべからず。短歌は、前代古穆の風を一変して、艶麗巧緻となれり。……勅撰の歌集は、古今集につぎて、尚、続々あらはれたれど、撰ごとに益下れり。ただ、古今集は、最初の勅撰にして、未だ全く誠を失はず、之に、花やかなる点を加味したるものなれば、花実二ながら具りて、後世の人より見れば、或は、却りて万葉より優れるものあらむ。[*25]

佐々『日本文学史要』

雄渾壮大なるものに乏しと雖も、其措辞の巧妙なる、其声調の優美なることは、遠く奈良朝の右に在り。[*26]

これらは、明治三十一年頃までのもので子規が『古今和歌集』を罵倒する以前ではあるのだが、子規の提唱の数年後に現れる「国文学史」の論調も基本的に変わらない。明治三十七年の『日本文学史』（塩井正男・高橋龍雄）は、次のように述べる。

万葉の五七調が崩れて、七五調となりしかば、やや荘重を缺くが如きも、その思想の巧妙優美なる点においては、遥に勝れたり。[*27]

明治四十年の武島又次郎の『日本文学史』も同様の論調で、「華（花）実兼備」という語も踏襲される。

詞づかひの甚だ工麗になれるこれ、そのすぐれたる性質の一也。声調のきはめて流暢なる、これまたすぐれたる特色の二

也。而して思想やや華美になながれんとする傾向あれどなほ未だ万葉の深厚ありて後世の軽佻なく、実感こもりて虚飾なく、六歌仙時代の風体とほぼ同じく華実兼備の姿ある、これまたその秀でたる特色の三とぞいふべき。殊に声調にいたりては最この集の重をおきしところ、全篇玲瓏として珠玉盤上に走るの概あるはまことに後世の及ばざるものあり。[*28]

このように文学史においては、『古今和歌集』の評価は子規の提唱に関わらず、ほとんど変化がない。だが、教科書的な「国文学史」以外のものには、国文学者の著作であっても子規と同じようなことを述べたものがある。子規と同年生まれの芳賀矢一による『国文学史十講』である。明治三十一年の「帝国教育会の夏季講習会の講義録」であるが、永井一孝によって「繁閑要を得、且つ文学者の伝記、著書の解題さては作例などを漫然記載せる『日本大文学史』などに似ずして、文学の真正なる歴史的発達の点に意を注ぎたれば、国民の心的生活を知るには彼の書（『日本大文学史』）に勝ること万々なり」[*29]と評され、以後も長い生命を保った名著である。

かういふ趣向（比喩や擬人法）を全く取り去つたら、古今集は半分以上面白味を失ひます。内容は極めて浅薄で、深い思想や想像とてもありません。恋歌の中には中々面白いものがありますが、それもどうしても理屈に落ちる様な風があつて万葉の様な真摯な情を写して居らぬ様です。形式の上に於て艶麗になり、上手になつたのは、迚も万葉集時代の及ばぬ所であると云ふことをお話申して置きます。……古今集になつては、言葉を飾ることが巧みになつて、文学が形式に走り過ぎる。同じ思想を色々の形式に依つて現はす様に見える。要するに小刀細工になつて自然の処がなくなつた。[*30]

明治三十二年十二月の緒言によると、前年八月の帝国教育界講習会での講義をまとめたものだから、子規の激越な批判の半年後である。「この外の歌とても大同小異にて駄洒落か理窟ッぽい者のみに有之候」と断定した子規よりは温和な口調で、「内容は極めて浅薄で、深い思想や想像とてもありません」と述べるのである。似ていないだろうか。

さらに、明治三十四年の『日本文学史教科書』では「延喜以来の和歌も、また花月の景、恋愛の情をのみ歌ふ平安朝以来の通弊を免れずといへども、なほ花実兼ね備はれりと称せらる」[*31]と「花実兼備」の決まり文句で『古今和歌集』を一応は賞賛していた藤岡作太郎も、明治四十一年の『国文学史講話』では「儀容なく主張なき玩弄物」「即興的なる空文字」と平安時代の和歌を評し、貫之を論じては「その長所は穏健雅正なるにありて、天真爛漫にはあらず、所々自然を缺いて理屈の弊に流れたるが如し」と言う。

平安朝の作家等は万葉集の先達等が振粛したりし苦心を忘れて再び即興的偶詠の古代に復り儀容なく主張なき玩弄物を以てこれに擬せんとするに至れるなり。さらば延喜時代に和歌が勃興したりしといふにも関はらず、かかる即興的なる空文字を連ねて、古今集の撰者等は満足し得たりしか……（貫之の）長所は穏健雅正なるにありて、天真爛漫にはあらず、所々自然を缺いて理屈の弊に流れたるが如し[*32]

「国文学史」は初学のためのもの、教科書という制約の多い出版

物では遠慮された本音を講話の形で述べたということであろうか。新日本古典文学大系の解説に「その主張の明々白々たる痛快さに、嘗て昭和十年代の杏壇の教授はおろか、若い学生たちも手を拍いて喝采したところ」と記したような光景は、明治四十年代から連綿として続いていたのであろう。

蕪村についての評価

『万葉集』や『古今和歌集』では正岡子規の影響は言われるほどに大きくなかった可能性があるが、蕪村評価については、日本古典文学大辞典の言うように、子規の役割は額面通り、非常に大きなものであった。

「国文学史」を順番に眺めて行くと、子規による蕪村の発見と称揚が文学史の著者達によっても言及されている。蕪村においては、たしかに子規が「国文学史」を導いているのである。

まず、たびたび引用している三上・高津の『日本文学史』下は芭蕉と蕉門について四ページに及ぶ解説を施しているが、蕪村の名前さえ取り上げられない。千代女・蓼太・蘭更他が挙げられているにも拘わらず、である。

是れより後、俳諧永く衰へず。たゞ漸く商工者流、文学思想の薄ものゝ、嗜むところとなりしかば、芭蕉および其高足弟子の如きは復出でず。まゝ俗了し去りて、高雅韻致を失ひしものさへあり。されども、之を好むものは、転た多かりき。其際尤名ありしものは、明和安永の頃に、女流加賀の千代あり。天明に雪中庵蓼太あり。寛政に高桑蘭更等あり。天保に其門人対塔庵蒼虬の如きあり。何れも、一時一方に覇を唱へし人なりとす。[*33]

大和田の『和文学史』も同様で、芭蕉、其角、嵐雪、去来に関する略伝と作例があるが、近世中期以後については「俳諧は前期に之を語れりますます行はれて田夫野人も之を弄ぶに至りぬ」[*34]と簡単にまとめるばかりである。以下、鈴木弘恭の『日本文学史略』、関根正直の『日本文学史』、萩野由之の『日本文学史大要』等、芭蕉にやや詳しく触れた後は、蕉門の十哲、雪中庵蓼太、横井也有、そして女流の代表者として千代女に触れる程度である。似たようなものばかりなので、鈴木弘恭の『日本文学史略』だけを紹介する。この本は、其角以下、服部嵐雪、向井去来、河合曽良などいわゆる蕉門の十哲を列記してことごとく略伝を掲げ、その後は至って簡単に済ませている。

又是より後。婦人にして名声の高かりしは。加賀の千代女也。【千代は。加賀国松任駅の人にて……その秀吟人口に膾炙せるもの多し。今は煩はしければ省きつ】さて此の俳諧を嗜むものは。後世に至りてもますます許多なれども。其技漸々卑俗に走り。専ら巧みなるをのみ旨として。古への如く優調なる者鮮し。さて其例を示すべきなれども。都合によりて今は略しつ。[*35]

千代女以下の扱いで、最初期の文学史においてはいないも同然の蕪村であったが、明治三十年の池谷一孝（後年の永井一孝である）『日本文学史』で、ようやく中興俳諧の一員の名列に載せられる程度になってくる。

三浦樗良・谷口蕪村・大島蓼太……加藤暁台・高桑蘭更等の徒

当時俳風の日に非なるを慨嘆して刷新を謀り稍々古に復する観ありしが『新古今』時代の華麗巧緻なるは『古今』時代の華実並有せるに及ばざりし如く到底蕉風創始のころに及ばざること遠かりき。[*35]

とはいえ、横井也有、成田蒼虬、桜井梅室、田川鳳朗などと同列である。

また佐々政一（醒雪）の『日本文学史要』は、教科書として作られた一五〇ページほどの小冊ながら「其作者の有名なるものは、貞徳、宗因、芭蕉の外に、其角、嵐雪、去来、支考、許六、蕪村、蓼太、一茶等極めて多けれど、就中、芭蕉は古今独歩の名あり」[*37]。と概説して芭蕉の伝記を簡潔に記し、守武、宗鑑、貞徳、宗因、芭蕉、其角、蕪村、蓼太、一茶の作例を挙げている。蕪村の作品は「さしぬきを足でぬぐ夜や朧月」と「春の海ひねもすのたりのたり哉」の二句、今も蕪村の代表作と目されているものである。芭蕉の七句には及ばないが其角と並ぶ。

芳賀矢一の『国文学史十講』は、『古今和歌集』の評価においても子規との関わりを感じさせたが、平易な語り口で蕪村を評価し、さらに、直接、子規に言及する。

天明安永の頃、大阪に居った谷口蕪村といふ人は画も上手に書いた人で、主観を離れた画の様な発句を詠じました。語句の上などにも進歩が認められます。正岡子規君など日本派俳諧家が賞賛されるのはこの人です。天明以後になつても、俳人の流派は綿々として絶えませぬが、とても元禄、天明を凌駕する程には至りませぬ。[*38]

子規が蕪村を称揚し、それが文学史の叙述に影響した様子は、次に掲げる藤岡作太郎の『日本文学史教科書備考』（一九〇一）においても、はっきりと知られる。

蕪村句集、同後集、同文集など近頃大いに行はれ、また俳諧文庫十二編（蕪村暁台全集）にのせたり。天明三年没す。年六十八。蕪村句集講義、先年以来、雑誌ほとゝぎすに出づるを、漸次単行本として出板す。其伝記には大野洒竹氏の与謝蕪村、正岡子規氏の俳人蕪村（俳諧叢書第二）等あり[*39]

このころを境として、以後の「国文学史」で近世俳壇刷新者としての蕪村に触れないものは無いようになってくる。

俳諧俳句は、平民文学となりて、流行の範囲広まるに従ひ、漸く卑俗に陥りしが、天明時代に大島蓼太・与謝蕪村出でて一時の盛を極めたり、ことに蕪村の清新警抜なる詠は、今日新派の渇仰する所なり。[*40]（明治三十五年　岡井慎吾『新体日本文学史』）

蕪村に言及することのまったく無かった明治二十三年の『日本文学史』の著者達が教科書用に内容を精選した『刪定　日本文学小史』（明治三十五年）においても、きわめて簡単ではあるが、蕪村は也有や蓼太程度の扱いを受けるようになる。

中にも、蕉門の十哲と称せらるる、其角、嵐雪、許六、支考、去来の徒ありて、よく師道を継ぎたり。是より後、俳諧長く衰へずして、也有、蕪村、蓼太、暁台、蘭更等の名家あれども、終に、芭蕉の如きは、また出でざりき。[*41]

明治二十三年から明治三十五年の十二年の間に、子規の力によっ

て「国文学史」における蕪村の位置づけは明確に変わったのである。

註

＊1 近代デジタルライブラリーに五点、同じ著者の『国文学史』が収められている。いずれも早稲田大学の講義録で、最も新しい明治四十三年度の講義録では、明治四十一年の藤岡作太郎『国文学史講話』までを紹介している。以下の引用は、緒論第二章　六ページ。なお、この資料も含め、引用した資料の多くは国会図書館の「近代デジタルライブラリー」の恩恵を受けた。具体的には、『竹里歌話』と「国文学史」の類の全部である。

＊2 『国文学史』　緒論第二章　一七ページ。

＊3 『日本文学史』　緒言　一ページ

＊4 『和文学史』　自序　一ページ

＊5 『日本文学史』上　総論第一章　六ページ

＊6 『和文学史』　凡例　一ページ

＊7 日本文学史』　緒言　五ページ

＊8 『日本文学小史』の目次。角書きに「教程」とあり、近代デジタルライブラリーのタイトルは「日本文学小史：教程」である。

＊9 『古今和歌集』（佐伯梅友　昭和三十三年）三ページ。解説の執筆者は西下経一。

＊10 『古今和歌集全評釈』（竹岡正夫　昭和五十一年）序　二ページ

＊11 正岡子規は、明治三十一年二月十日の「歌よみに与ふる書」から三月四日の「十たび歌よみに与ふる書」まで「日本」紙上に歌論を連載した。「貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候。」は、二月十四日の「再び歌よみに与ふる書」の冒頭である。

＊12 『古今和歌集』（小島憲之・新井栄蔵　一九八九年）解説　四五六ページ。

＊13 『日本文学史』第二篇　第三章　奈良朝の散文　一〇七ページ

＊14 同前　第二篇　第四章　奈良朝の和歌　一三七ページ

＊15 『日本文学史略』第四編　奈良朝の文学　六七ページ

＊16 『日本文学史大要』第四期平安朝時代の文学　二三から二四ページ

＊17 『日本文学小史』第三篇　藤原時代又源氏物語時代　藤原時代の歌五丁表

＊18 （同前　六丁）

＊19 『国文学小史』緒論　三ページ

＊20 講談社『子規全集』第七巻　二三ページ。

＊21 『竹里歌話』（古泉千樫編　大正十一年）三一頁。

＊22 同前　二三四頁

＊23 『日本文学史』上　第三編　平安朝の文学　第七章　和歌、歌序、及び艶詞　三七一ページ

＊24 『和文学史』第三編中古　第一期和歌和文　一五八ページ

＊25 『日本文学小史』第三篇　藤原時代又源氏物語時代　藤原時代の歌二十丁

＊26 『日本文学史要』第三章　平安朝　律語　二七ページ

＊27 『日本文学史』第四章　平安文学の総説　第二節　平安朝の韻文　一和歌　七九ページ

＊28 『日本文学史』上　第三期平安時代第五章　古今和歌集一五二ページ。近代デジタルライブラリーに武島又次郎の『日本文学史』が四種類収められている。

①明治三十九年人文社蔵版のもの。これは奈良時代までで『万葉集』や『古事記』を解説し、片仮名の製作で終わる。平安時代以後はない。

②「早稲田大学三十九年度文学教育科第一学年講義録」として、明治四十年に早稲田大学出版部から出された『日本文学史』上。鎌倉時代の「小説および軍記物語」までを収めて本文二七〇ページ。

③「早稲田大学三十九年度文学教育科第二学年講義録」として、同様に明治四十年に早稲田大学出版部から出された『日本文学史』。江戸時代の鶴屋南北や清水浜臣あたりまで記述の範囲とする。五四五ページ。

④「早稲田大学四十二年度文学科第二学年講義録」として早稲田大学出版部から出された『日本文学史』下。室町時代と江戸時代が範囲であり鶴屋南北、清水浜臣あたりまで取り上げているのは第三に挙げた『日本文学史』と同じ。二三四ページである。ここでは②から引用した。③にも同じ内容の記事があるが、ページの立て方に僅かに違いがあり、ページ番号は一六六になる。

*29 『国文学史』緒論　第二章　国文学に関する著書　一三ページ
*30 『国文学史十講』第四講　中古文学の一　九四ページ
*31 『日本文学史教科書』第二章　平安朝　二三代集の撰進　二三ページ
*32 『国文学史講話』第三章　延喜時代　一一五ページ
*33 『日本文学史』第六篇　江戸時代の文学　第四章　俳諧、俳句、俳文、狂歌、狂文の類　四〇六ページ
*34 『和文学史』第五篇　近世　第二期　俳諧狂歌　五六二ページ
*35 『日本文学史略』第十篇　慶長以後の文学　二九八ページ
*36 『日本文学史』第六期「江戸時代の文学」第三章　歌謡六二二
*37 『日本文学史要』第六章　江戸時代　律語　一一〇ページ
*38 『国文学史十講』第九講　近世文学の二　二三七ページ
*39 『日本文学史教科書備考』一二八ページ。この本は書名の示すように、自身の『日本文学史教科書』のための教師用参考書である。『日本文学史教科書』の方にも蕪村はもちろん取り上げられている。「天明の頃、江戸に大嶋蓼太、京に谷口蕪村等ありて、更に頽勢を挽回す」（第四章　江戸幕府の世　八四ページ）と蕪村の紹介があり、作例として「春の海ひねもすのたりのたりかな」、「ほととぎす、平安城をすぢかひに」、「鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな」、「蕭條として石に日の入る枯野かな」の四句を挙げている。蓼太のが「五月雨やある夜ひそかに松の月」だけであるのに比べると非常な優遇である。
*40 『新体日本文学史』一　近世文学又江戸文学　俳諧狂句　一一ページ。この本は江戸時代から叙述を始めて時代をさかのぼる形式である。そこで「新体」とかぶせたのである。
*41 第七篇　江戸時代の文学　第四章　俳諧、俳文、狂歌、和文、松尾芭蕉　一八九ページ。なお、近代デジタルライブラリーでのタイトルは「刪定」を省いた「日本文学小史」である。